

れを掌どり、其後ついに此家の職掌となり、神宮皇宮ともにつくり奉れるが、移りて木工長上に傳はり、木工長上を、後にはひろく番匠に傳はれること、古語拾遺延喜の神祇式、大殿祭詞、延暦の儀式帳、心御柱記などを照し見て知らる、また此尺を用ふることたゞ造營のみにあらず、伊勢神宮に奉る御装束、また御調度等も此尺を用ひしこと、寛正四年に荒木田氏經のしるせる日次記に、以往より定まれる鐵尺をもつて、御装束を差たりと有にてしらる、けだし是は垂仁天皇の御世にはじめて伊勢の神宮を造られし時よりの御制を易給はざる式なること、大日本記にその時の御杖代たりし、倭姫命の左、左、右、右、違事奈久奉仕と宣へる御語にて知られたり、

〔出雲風土記楯縫郡〕五十足天日栖宮之縱橫、御量千尋、梶繩持、而百結結八十結結下、而此天御量持、而所造天下大神之宮造奉、

〔日本書紀神代〕一書曰、略、高皇產靈尊、中勅大己貴神曰、中汝應住天日隅宮者、今當供造、即

以千尋梶繩結爲百八十紐、其造宮之制者、柱則高太、板則廣厚、

〔倭名類聚抄十〕尺、魏武雜物疏云、象牙尺、辨色立成云、尺竹量也、太加波

〔倭訓栞前編〕十、さし、度をいふは指渡るの義、物さしともいへり、

〔節用集大全毛〕尺、尺

〔物類稱呼四〕ものさし、武州河越にて、しやく共云、常陸にてしやくごと云、

〔倭訓栞中編〕二十六、ものさし、度をいふ、物をさしはかるなり、又長さしあり、長さ八尺あり、尺づゑは長さ七尺なり、

〔伊呂波字類抄波〕度、知長短謂之度、度之所起於忽、從一寸寸爲一尺、十尺爲一丈、六尺爲一歩、三百

丈尺寸

爲六十歩、